

徳富蘇峰記念館

目録 (3)

明治中期の書簡展(一)

棟方志功絵画展

(昭和56年7月から
昭和57年6月まで)

棟方志功絵画展

棟方志功(一九〇三—一九七五)

棟方志功と当館の創立者塩崎彦市とは親友であつた。彦市が病氣をするとすぐに心温まる見舞の絵入り手紙を送つてくれた。志功は蘇峰堂の牡丹・梅花・四季折々を愛し、しばしば夫人と共に来遊した。彦市の蘇峰に対する姿を通して蘇峰を敬愛し、蘇峰の揮毫した四枚襖の裏側に己も龍を描き、永く蘇峰堂に残してほしいと自から筆をとり、一日で描きあげたのがこの「御龍図」である。

「御龍図」一九七四年、紙本着色、襖四面171.0×340cm

志功の襖絵の中でも龍は稀な題材で他に類を見ない。天に昇る龍を墨で描き、金箔と淡い朱をほどこした画面は、品格の高い勇壮なもの。永眠する一年前の作。

版画家関野準一郎氏は、この「御龍図」を評し、棟方の毛筆で描いた絵には出来、不出来が多い。只いいのになると掛軸がない程いい。芭蕉の岩にしみ入る蟬の声よりも大きな声が潤達になつて筆にうつり、堰を切つて腹底か

ら滲み出る、何の構えない彼の倭画と称する墨彩画が、誠に奔放に画面よりも宇宙をのたくりまわつていふ感じがである。雨雲でもあると、ぬけ出して天に昇るのではないかと思われらる快作である。と言つていい。

「二菩薩宇宙飛図」一九七四年、紙本着色、襖二枚167.5×165.0cm

この襖二枚に描かれた鮮やかな美人菩薩は、志功が最後の外遊(一九七四年十月)に出発する十日ほど前に、忙しい予定をやりくりして蘇峰堂に来堂し、一日がかりで描きあげた。「これで約束がはたせた」と大声で彦市に語りかけ、満足げに優しい笑顔をうかべ、長々と廊下にねそべり、ひどく疲れた様子であつた。その頃からすでに志功の肝臓は病におかされていたので、これが志功の大作の最後の作品となつた。この美人菩薩は寛容と豊かさとなつた。彦市の病床をなくさめ続けていたものである。それから半年後、志功は入院生活を送つていた。彦市が見舞に行くと、一枚のダルマの絵をくれた。

「達磨図」一九七五年、紙本着色35×23cm

志功はかねてより達磨は難しいと言つていたので、塩崎彦市が一枚贈呈するた、大喜びであつた。はからずもダルマが志功の病床での最後の題材となつた。蘇峰も敗戦後百二十枚の達磨を書いている。志功の親友草野心平は次のように語つていふ。「この達磨自体が

志功そのもので、言はば象徴的自画像と言つてもいい。この達磨を見ていると、私はむしろ悲しくなる。「略」。彼は病院生活中に達磨を百点描くと言つたそうである。結果はどうだつたらうか。棟方達磨、いかにも象徴的である。火達磨が転げ回つていふうちに燃えつきた、そのように凄烈な彼の生涯だつた」と。

この他「石鎚山岳図」(一九七四年紙本着色、二曲一隻166×164.6cm

「石鎚神山」・「花」・「志功の彦市への見舞状」ザクロの絵」等が展示されている。

世界の志功の最晩年の大作が、蘇峰堂に残され、彦市との友情のために渾心の力を振つて描いた志功の魂が、見る人々にある気魄を感じさせる。蘇峰と共に蘇峰堂に永く残してほしいと言つた志功の七回忌にふさわしい展示である。

明治中期の書簡展(1)

徳富蘇峰記念館には蘇峰宛の書簡三万点が保管されている。今回の書簡展では其内から明治二十年に二十四才の蘇峰が、民友社を興し、雑誌「国民之友」を、更に二十三年には「国民新聞」を創刊し、民友社の最盛期を築いた明治二十年代のものを中心とした。出版に際し苦心したことは遺憾ではあるが、蘇峰の交遊範囲が多岐にわたつていふため、二百余名の人物の中から、四十四名に絞らなければならなかつた事である。が次回以降に順次分野別

に展示する計画である。蘇峰の交際者の分野の多彩さは、そのまゝ「国民之友」の性格を表わしているものといふよう。

「国民之友」は「政治・社会・経済・文学の評論」と銘うっている事でもわかるように、文学だけを取りあげた文芸雑誌ではなく、総合雑誌の中の文学であつた事に重要な意味がある。現在の「文芸春秋」や「中央公論」の先駆的雑誌であり、これが明治時代の青年・知識層に歓迎され、大きな影響を与え、ひいては明治二十年代の思想界をリードしたともいわれる。

維新以来三千余種の新開雑誌が生まれては消えて行つた中で、「国民之友」が明治31年372号まで続いた事は、尾崎紅葉主幹の「我楽多文庫」(硯友社刊)が27号で廃刊になつたのと比較しても、当時同誌がいかに熱烈に愛読されていゝたかが知られる。

その間に民友社に出入りした人々は、政治家・実業家・ジャーナリスト・宗教家・教育家・学者・文筆家等、各分野の意気に燃えた人々であり、その志す所を発表する自由の場が「国民之友」であつた。各々は寄稿者と民友社という形ではなく、寄稿者と蘇峰という蘇峰との人間的信頼関係で結がつていたのである。この事は当記念館所蔵の蘇峰に宛てられた書簡が如実に語つていふ。

今回の展示は、蘇峰の文壇へのデビュー作「将来之日本」を出版した経済

雑誌社の主筆田口卯吉をはじめとして、その序文を書いた東京市長尾崎行雄、恩師新島襄、「国民之友」の寄書欄に寄稿している政治家（大隈重信・矢野文雄・中江兆民・高田早苗・島田三郎）教育家・宗教家・学者（内村鑑三・新戸辺稻造・大西祝・岡倉天心）新進の文筆家（坪内逍遙・森鷗外・幸田露伴・山田美妙・徳富蘆花・矢崎鎮四郎・国木田独歩）伝統文芸の文士（依田学海・池袋清風・櫻庭蘆村）外国文学の紹介につとめた人々（森田思軒・内田魯庵）等の書簡を選んだ。これらの人物と蘇峰との交遊関係を一堂に展示する事によって、明治中期の若々しい息吹と活力とを示したい。

出展した四十四名の生歿年と明治二十年当時の年令の表を左に掲げる。青年蘇峰の呼びかけに集まつた若き人々の活力の大きさを窺う事ができよう。

蘇峰は「現代（昭和八年）の人々は明治二十年代に於ける民友社が、日本の思想界、文学界、教育界、宗教界、其他社会に於いて、如何なる効果を奏したかを記憶する者はあるまい」（日本文学講座第十一巻明治文学）と五十年前を回顧しているが、この感慨は、明治二十年代が蘇峰にとって充実した華々しい時代であった事を推測させる。明治中期の書簡の展示は、蘇峰の明治文化史上の位置を再確認する意味に於ても、大きな意義があろう。

次に実物展示では、「国民之友」の創刊号、終刊号、英文国民之友

「THE FAR EAST」、山田美妙の「蝴蝶」の挿画で話題となつた37号、鷗外等の訳詩集「於母影」の載つた58号「舞姫」の69号、「国民新聞」の三千号、四千号等の刊行物の他に、当時の民友社内の様子を伝える「国民之友編輯要録」、社内で作成された手書きの「民友社・国民新聞社年譜」蘇峰の原稿、「国民新聞各月末印刷高表・広告料高表・その高低図」文筆家に支払われた原稿料の載っている明治二十五年の「元帳」、蘇峰の昼食の鰻飯代15銭、洋服屋仕立10円75銭などがみられる「民友社と徳富氏の受授之記」等の史料展示も行なう。これらは、民友社内の様子と興味深く、生々と伝えてくれるものである。

ケース番号 17

「国民之友」37号 明治22年1月1日発行 新年附録に、山田美妙の「蝴蝶」坪内逍遙の「細君」が掲げられた。

「国民之友」には第7号から「藻塩草」欄が設けられた。これはいわば学芸欄であつて、この「藻塩草」がしだいに発展し、附録にまで拡大され、明治20年代の有力な文学者を網羅し、文壇に重きをなすに至つた。第37号は二万部を売つた。当時雑誌は千部を越すことのまれな中で、破天荒の刊行部数であつた。美妙の「蝴蝶」はその挿絵に作者の希望によつて、当時としては正に驚異であつた女の裸体畫を挿入して、社会問題を惹き起したことは有名である。

山田美妙（一八六八—一九一〇）
明治23年9月8日 山田美妙

拝啓 いつぞや御はなし申上候処、御望みもありたる韻文全論の儀、これより着手悉皆世に出す所存、就て聊か御相談申上候。今後小生が草する韻文全論は其名を日本韻文論と命じ、韻文に關する一切の事を論ずる心得にて、書物にすれば二三百頁の物には是非相成候。然れども目下の状況書物にして大部の論文は思ふに賣口遠かるべく、自然人の目に触るゝ事難きに於ては、稿じたる素志にも背く事に候へば、雑誌「国民之友」の如きに出したる方然るべくと存じ候まゝ、重ねて貴意向上候。元より社会全般に通ずべき論にもあらざ、韻文といふ一局部に於いての細論にて、多数の読者を満足せしむる事は出来ず候へども、今や筆動いて制するに由無く、即ち右の御相談に及び候。もし其長きを厭はれず国民之友に連載下され候御見込ならば、毎回御約定を結びたく、草稿いたすべく全篇皆出の上、或は一書に御まともあるもそれは御自由と存じ候。目録御入用ならば差上げても宜しく、実は此論文のためには唯今までに可成りの労を費したる次第に候。「後略」

された。明治文学研究者柳田泉氏は、美妙がこの韻文論をその中途でよしてしまつた事を残念がつてゐるが、美妙から蘇峰への書簡41通を讀むと、美妙が書く事を中断したのではなく、当時各界の人々によつて飾られていた寄書欄に美妙の作品を8回続けて出す事が限度であつたらしく、蘇峰が美妙の原稿を受けとりながら8回以後は掲載しなかつた模様である。美妙研究者にとつて、これは新たに発見された重要な事実であるので、もう一通の書簡を次に紹介する。

明治24年3月31日 山田美妙

拝啓 爾来久しく御疎闊打過申候。さて一二ヶ月前差上げたる国民之友原稿韻文論、其後更に御かかげ無之、いろいろ寄書欄の御都合もこれあるべしと存候へども、兎に角余り長引きて出ざるは、いろいろの物議のたねともなりて心苦しく候まゝ、ここに向上候。もし御不用に候はゞ、何卒至急御返却被下度、さればとて小生も思ひ立ちたる念、世評は兎に角其統稿は、日本評論に於てなり統して世に出す所存、御都合の次第によりては、決して決して御遠慮無く御煩忙中御手数恐入候へども、至急可成は明日中に御返附なしたるべく右願上候。草々敬具。三月廿一日 美妙 蘇峰先生

坪内逍遙（一八五九—一九三五）
逍遙は「細君」を書いた当時、芸術上の苦悶を深く経験すると共に、断然小説に筆を絶つことを決心したと言わ

れる。それは文学生涯に於ける一転機で、小説から演劇へ歩みを移し、行き詰っている劇界のために改善の道を講じようと志した時期といわれる。逍遙の14通の書簡はすべて未発表のものであり、紹介状にしても、弟子の世話にしても、誠実に人の面倒を見ている人柄をよく表わした書簡である。初中等教科書編纂事業にも尽力している様子である。

ケース番号 16

「国民之友」 58号 明治22年8月2日発号 夏期附録として、S・S・Sの「於母影」、養庭篁村の「良夜」、森田思軒の「消夏漫筆」、が掲載された。

「国民之友」が特別附録として、小説を載せ初めたのは、従来此種の評論雑誌が漢詩文或は和歌の外は、小説其他の純粹美文を決して載せなかつた習慣を破つた、思い切つた新例であつた。従つて「国民之友」の附録は著しく読書界の興味を惹き、いつもは小説を読まない知識層の注目をも集めて、世評の焦点となつた。自然此附録に載つたものは大家を公認される形となつた。第58号の「於母影」にいたつて、この欄および附録は不動の位置を占めたと見られ、加えて第69号に森鷗外の「舞姫」、尾崎紅葉の「拈華微笑」、山田美妙の「酔沈香」(詩)をならべていちだんと注目を引いた。

拜啓二昨日早朝差出し候批評家ノ秘訣ナル一篇、余リツマラヌ者ニ候ヘトモ、イササカ解嘲ノ意味モ有之候ヒシニ、今ニ御掲載無之果シテ御没書ニ相成候ツモノニヤ、右乍御手御報煩シ度候也、早々不一、九月廿九日 森林太郎 徳富猪一郎様 侍史

人が怒つたり、憤慨したりして、己の感情を正直に表わしている書簡は、通り一遍の普通の書簡よりも重みのあるものである。その意味でこの書簡は、鷗外の一面を知るうえで大変興味深い。

この頃鷗外の家は「国民之友」の夏期附録に「於母影」を出すというので、落合直文、井上通泰、市村瓊次郎などが来訪し、夜もふけるまで話し続けていた様子である。人の出入が多く、夫は客と文芸談に夜を更かし、それに興味のない妻の態度が鷗外の氣にいらず、来客で賑やかな家の中にあつて、夫の心は次第に新婚の妻から離れて行つた。この書簡は初婚の妻との離婚直前に書かれたもので、秀才・誠実・寛容・謹厳などの言葉で表わされる鷗外のイメージからは、はみ出たものではあるが、離婚直前に於ける鷗外の心緒の乱れを示している意味で珍らしい書簡である。事情が何であつたにせよ、その筆蹟と文章の勢から、若かりし鷗外の活力を十分に感じさせるものである。

退これ谷まるの悲境に陥り、なす処を知らず。もし此まゝに押進まば、只私共の前途暗黒之外無、即座親を泣かせ友を怒らし、終生の事一朝にして空しく、兩個の人間生きて甲斐なき事と相成可甲、願へ此如心痛なる境に陥りたる兩人の心情御推察被下、万事御頼み申上度、佐々城氏と御相談の上、宜しきに御取斗らひの程願上候。頓首、十一月六日、信子・哲夫 徳富猪一郎様

この書簡は、蘇峰の尽力によつて、信子の両親佐々城夫妻から条件つきで結婚の承認を得、自宅で結婚式をあげる五日前に書かれた書簡である。五日前になつても、両親の承認を得られず、すでに独歩の家に来ている信子共々、悲嘆にくれ蘇峰に泣きついていているものである。

ケース番号 22

徳富蘆花(一八六八—一九二七) 明治30年10月4日 徳富蘆花(前略)。殊に子たる者が親に向ツテ戦を挑むなどは私の性分にてあまり好まざる事に候得共、兎角致方なき事と詮らめ可成速かに滑らかに此関門を通りぬけ度く、其為め御加勢を相願ひ度く奉存候。従来私は末子にてはあります。乍無念不肖千万なるより御両親別して母上の眼中には塵芥の如く思はれや、もすれば輕蔑の一念眼に口にあらはれ申候。(中略)私に於ては此上十分に心を用ひて何處までも自尊の氣を養ひ自立を務め御両親の御安心を来す様に務む可く候間、何卒御向親別而母上に於ても此精神を了し、

第一、私の存在を認め
第二、私の家の存在を認め
第三、私の今位地を作りつゝある所なるを認め 私並にお愛を一同御使ひ被成候につきても、直接御両親に關係したる事、比較的重要なる事に止めて、婢僕的の務は御用捨被下候様、私ども昔の健、健にて何をしても角をしてもそれ健をやれ、健をつかへと云ふ様な事は御用捨被下候。(中略)。世の中はドウでも構はず候得共最後の本丸なる親兄弟の眼中に輕蔑されては生き甲斐も御座なく候。無論吾務むる所を務めて吾位置の進み信用の加はり重味の増すに従つて自然親の情も喜ぶは当然の事今グツグツ云ふよりも先づ其方は黙忍して務むる所を務むるが得策に候得共、並々ならぬ御両親の事なれば、イツソ明白に申出でて同情を願ひたる方宜敷かと存候次第に御坐候。山陽の英物すら春水の膝下に窮屈を歎き候。尊大兄の上も乍憚知らざるにあらざるが子を子供視し、子供が親の桎梏に苦むは六千年の事実、今更言ふも贅に候得共、私は幸にして已に其難関を昨夢となし了して居玉ふ尊大兄を有し候間、右の処心腹を打明けて御頼み申上候。若し尤もと御認め所あらば幸に宣敷御計らひ被下度奉願候。謹言。十月四日夜 健三郎拜 家大兄生下

これが三十才の蘆花が三十五才の蘇峰に送つた書簡である。外国から帰つたばかりの兄の体力の衰えを案じた後、

国木田独歩(一八七二—一九〇八) 明治28年11月11日 国木田独歩 拜呈 陳者私共目下の事情、恰んど進

森鷗外(一八六二—一九二二) 明治23年9月29日 森鷗外

自分の家での存在の独立を認めてほしいと、兄にその助力を頼んでいる。兄と弟、親と子供の多くの問題を提起している書簡として興味深い。己の気持ちをこのように素直に兄に語っている蘆花が世に徳富兄弟として有名な兄弟げんかの主人公のいつわらざる姿であったと思う。性格の異った個性の強い兄弟が、それぞれ苦しみ、葛藤の末、異なった分野でその足跡を残した偉大な兄弟であった。

遊中、独立を宣言し、この他各人の書簡は、蘇峰とのかゝわりを示し、又その間の社会の様子を窺い知り得るものである。

ケース番号 23

受授之記 明治二十二年一月 徳富氏ト
民友社 20 × 12 cm
二月

一金四拾円也 本月分

御老人へ

十日 六銭

車代 猪一郎氏

十二日 一円

猪一郎氏

十四日 二円五拾二銭

官報郵便代

十五日 九円

官報百部代

十六日 二円

新島氏電報代

二十日 拾五円

猪一郎氏

御老人へ

(略)

蘇峰が両親を大切にされた事は有名な話である。老人渡しとあるのは、父親の事と思う。同年四月には御老人西京

行旅費として50円、その後西京御老人送20円、その他老人渡が36円ある。憲

法注釈二冊代72銭、鰻飯代15銭、水代

1銭、洋服屋拂10円75銭などが見られる。

民友社・国民新聞社年譜

明治20年民友社創立から34年までの民

友社社史が記入されている。21年5月

「政治一斑」を出版し、是を民友社書

籍出版の最初とす。7月には民友社を

赤坂区榎坂町から京橋区日吉町20番地

に移し、23年1月には同町4番地に移

転している。22年11月に「国民之友」

67号発行停止。12月15日解停。「国民之友」も「国民新聞」もかなり発行停止にあつてはいる。「国民新聞」の発行停止回数、23年1回、24年3回、25年1回、26年1回(発行人入獄1回)

27年4回、28年3回、同年4月13日

「国民之友」の編輯人中村修一、伊藤

首相に關する論文の爲め入獄、6月12

日出獄、同月15日「国民之友」発行停

止、同月18日解停、同月23日「国民之

友」発行停止と、「国民新聞」も「国

民之友」も発行停止をくり返すような

活動をしている。29年2月20日「極東

THE FAR EAST」第一号を発行、

30年には「国民之友」を毎月一回刊行

に改めるとあり、だんだんとその規模

の縮少の兆が見えている。31年8月

「国民之友」372号、「極東」30号「家

庭雑誌」119号三雑誌の廃刊を伝えてい

る。これを「国民新聞」に併せること

となり、民友社の業務は書籍出版のみ

となる。その他広告料の変遷など興味

ある社史が記録されている。

ケース番号 24

国民之友編輯要録、明治28年1月

民友社 235 × 155 cm 「国民之友」 245号か

ら286号までの編輯の原簿のようなもの

である。社説が何行、特別寄書は誰に、

藻塩草は何篇、誰にと蘇峰自からその

構成にあつた事や蘇峰自からその

ある。朱で書き加えたり削除したり、

題名で苦心したり、当時の民友社の活

気が伝わってくるようである。表紙裏

には落書きがみられ、落書きの上に落

書きがなされ、まっ黒になつてはいる。

ケース番号 28

「国民之友」創刊号 明治20年2月15日発号

「嗟呼国民之友生れたり、何が故に生まれたるか 現今日本の時勢其の必要を感じればなり、必要とは何ぞや、吾人乞ふ試に之を説かむ」

この蘇峰の第一号の社説ともいふべき「国民之友欄」は、蘇峰の生の声であり、「旧日本の故老は去日の車に乗り、漸く舞台を退き、新日本の青年は来日の馬に駕して漸く舞台に進まんとす、

実に明治二十年の今日は、我が社会が冥々の裏に一変せんとするものなりと云はざる可らず、来れ、来れ改革の健児、顛覆するにあらず、之を整頓するにあるなり」と呼びかけている。

昭和五十六年七月

徳富蘇峰記念塩崎財団

明治中期の書簡展(1)

出展書簡筆者の生歿年及び明治20年当時の年齢

氏名	生歿年	明治20年の時	
勝海舟	1823-1899	64才	江戸末期、明治初期の政治家
依田学海	1823-1909	64才	漢学者、演劇評論家
山県有朋	1838-1922	49才	明治時代の軍人、政治家
大隈重信	1838-1922	49才	明治・大正の政治家、早稲田大学の創立者
伊藤博文	1841-1909	46才	明治時代の政治家
新島襄	1843-1890	44才	明治時代の教育家、宗教家、同志社の創立者
陸奥宗光	1844-1897	43才	明治時代の外交官、政治家
中江兆民	1847-1901	40才	明治時代の自由民権論者、思想家
池袋清風	1847-1900	40才	明治初期・中期の歌人
矢野龍溪	1850-1931	37才	政治家、小説家
島田三郎	1852-1923	35才	政治家、明治・大正のジャーナリスト
下田歌子	1854-1936	33才	女流教育家
田口卯吉	1855-1905	32才	経済学者、文明史家
夔庭篁村	1855-1922	32才	小説家、劇評家
尾崎行雄	1858-1954	29才	明治・大正・昭和三代の政党政治家
坪内逍遙	1859-1935	28才	明治・大正時代の文学者、教育家
高田早苗	1860-1938	27才	教育家、政治家
内村鑑三	1861-1930	26才	明治時代の宗教家
森田思軒	1861-1897	26才	翻訳家、思想家、明治時代のジャーナリスト
新戸辺稻造	1862-1933	25才	明治・大正時代の教育家、キリスト教信者
岡倉天心	1862-1913	25才	明治時代の美術評論家、教育者
森鷗外	1862-1922	25才	明治・大正時代の小説家、戯曲家
阿部充家	1862-1936	25才	新聞記者
徳富蘇峰	1863-1957	24才	評論家、新聞記者、文筆家、歴史家
矢崎鎮四郎	1863-1947	24才	小説家、詩人
大山路祝	1864-1900	23才	哲学者、評論家
竹越愛山	1864-1917	23才	明治時代の史論家、評論家
石橋三又	1865-1950	22才	政治家、歴史家
中野忍月	1865-1926	22才	文芸評論家
井上通泰	1866-1898	21才	詩人
幸田露伴	1866-1941	21才	文学者、医師
山田美妙	1867-1947	20才	小説家、随筆家、学者
内田魯庵	1868-1929	19才	明治時代の小説家、詩人
徳富蘆花	1868-1927	19才	文学者
岩谷小波	1870-1933	17才	明治・大正時代の小説家
国木田独步	1871-1908	17才	童話作家
深井英五	1871-1945	16才	明治時代の小説家、詩人
与謝野鉄幹	1873-1935	16才	日銀総裁、枢密院顧問官
大槻文彦	1874-1928	14才	明治・大正時代の歌人、詩人
柳田国男	1875-1962	13才	明治・大正期の国語学者
与謝野晶子	1878-1942	12才	詩人、民族学者
長谷川時雨	1879-1941	9才	歌人
九條武子	1887-1928	8才	女流作家
		1才	大正時代の歌人